

成績の自己評価と社会的比較 および原因帰属の関連についてⅢ

愛知教育大学心理学教室 磯崎 三喜年
(昭和62年12月25日受理)

Festinger (1954) の社会的比較過程理論 (theory of social comparison processes) は、自己評価についての最も影響力のある理論の1つとされ、また、さまざまな社会的行動の説明にも適用されている。正確で安定した自己評価を得るために、類似した他者との比較がなされるというのが、その基本的な考え方である。

人は、できるだけ効果的に社会環境に対処していく必要がある、そのために他者との比較を通して、正確な自己評価を得るとともに、自己の明確な位置づけをはかることになる。

しかし、社会的比較は、正確で安定した自己評価を得るという側面に限られるわけではない。つまり、人は、自己を高め、自らを好ましいものとして知覚したいとの自己高揚 (self-enhancement) の欲求もあわせもっており、状況に応じて、このいずれかが顕現化したり、また双方が相まって、社会的比較行動を規定すると考えられる。

磯崎 (1987) は、現実場面での自己評価と社会的比較の関連を検討するため、大学の授業における期末テストの答案を返却した際、学生に自己評価を求めるとともに、テスト成績の高・低によって、社会的比較への情報接触欲求や知りたい情報の内容がどのように異なるかを調べている。

その結果、比較他者として自己と基本的に類似した他者が、また、情報内容としてクラス集団の平均点が好まれることが示された。しかし、テスト得点の高い群は、情報内容として最高点を知りたいとするものもみられるなど、一部、自己高揚的比較がなされていることが明らかにされた。

さらに、自己評価や社会的比較に関する情報接触欲求と原因帰属 (努力、能力、運、テストの困難度の4要因) との関連についても検討し、他者の得点を気にする度合は、テスト成績と正の相関

を示し、また、能力があり、テストが容易であったと考え、勉強したと答えるものが、他者の得点を気にかけがちであることが示された。そして、テスト成績は、自己評価と高い相関を示すとともに、努力要因と最も関連のあることが明らかにされた。

しかし、ここでは、自己高揚欲求の裏返しともいえる自己防衛的比較はみられていない。また、自己を多少なりとも脅すような情報を回避する傾向が存在することも、従来指摘されているが、そうした社会的比較の回避の問題についてはふれられていない。

そこで、磯崎 1988 は、社会的比較の回避や、自己防衛の心理のあらわれと考えられる下向きの比較 (downward comparison: 自分よりも劣っていると思われる他者との比較) について、テストの答案返却後ではなく、より情報の乏しいと思われるテスト終了直後の時点で検討を行った。

この場合、テスト成績のすぐれている群において自己評価は高くなっていたものの、尺度の絶対値としては必ずしも高くはないことが示された。また、情報内容として各群とも平均点を知りたいとするものも多く、より自然な形での情報接触傾向が認められるとともに、成績の高い群での自己高揚的な比較傾向と、成績の低い群での自己防衛的ないし社会的比較回避の傾向もある程度みられている。

その意味で、基本的な予測に沿った結果が得られているが、全体としてみれば、不十分な点もいくつか認められる。まず、社会的比較の情報接触欲求の指標である他者の得点の気になり方 (他者の得点を気にする程度) は、テスト成績の高・低別による差がみられず、テスト成績との有意な相関も得られていない。また、情報接触欲求が総じ

て低く、積極的な社会的比較の傾向は示されていない。これと関連して、比較を行いたいとする集団に関する結果も、成績の高・低にかかわらず、情報回避傾向がみられ、消極的なものとなっている。

テスト成績に対する原因帰属に関しては、努力要因が最も重視されていることなど、先の研究（磯崎，1987）と基本的に類似した結果となっている。

このように、先の2つの研究では、社会的比較と原因帰属に関して、ある面で類似した結果が得られているものの、答案返却時とテスト終了直後という状況の違いもあり、必ずしも十分に斉合した結果が得られているとはいえない。

状況の違いに関していえば、自己のテスト得点をフィードバックされた、答案返却時のほうが、自己高揚的または自己防衛的比較ないし社会的比較そのものの回避傾向が強まると思われる。

また、情報接触欲求の程度も、答案返却時ではテスト成績の高・低によって変わってくることが考えられる。すなわち、答案を返却されることによって、自己評価が明確になり、実際のテスト成績の高・低による差が生じてくると予測される。

この点は、原因帰属に関しても同様なことが推測される。つまり、テスト終了時での不明確な自己評価のもとで原因帰属を行うよりも、答案返却時のほうが、成績の高・低による帰属の仕方の違いは強まり、たとえば、成績上位群は、より自己を高められるよう努力や能力への帰属傾向を強めると考えられる。

こうした問題を検討するため、本研究では、同一人物を対象に、テスト終了直後と答案返却時の2度にわたって調査を行い、テスト結果に対する受けとめ方を、社会的比較や原因帰属との関連からみていこうとするものである。

さらに、これまで、原因帰属の要因として、努力、能力、運、課題の困難度の4つをとりあげてみてきた。しかし、これらのいずれの要因が、テスト成績と関わっているかを直接尋ねた形での資料を得ているわけではない。したがって、原因帰属に関する、帰属要因の重みづけについても検討を加えることにする。

方 法

調査対象者 「心理学概論」のテストを受け、その終了直後および答案返却時の2度にわたって、調査用質問紙に回答した大学生69名（男12名、女57名）であった。これは、データ分析に必要な回答を満たした、いわゆる有効回答者である。

手続き まず、「心理学概論」のテスト終了直後に、あらかじめ配布しておいた調査用紙に、一斉記入法により回答を求めた。次に、その2週間後、採点済みの答案を返却する際、先と同一の調査用紙を配布し、再び一斉記入法により回答を求めた。

調査項目 1. テストの結果に関する自己評価（1：悪い～5：良いの5段階評定）。

2. テストの結果に対する重みづけによる原因帰属：努力要因（努力したから、努力しなかったから）、能力要因（能力があったから、なかったから）、運要因（運がよかったから、悪かったから）、課題要因（テストが易しかったから、難しかったから）およびその他の要因の、いずれがどの程度結果に関わっていたかを全体を10として、数直線上に割りふらせた。したがって、最高が10、最低が0となる。

3. テスト結果に対する原因帰属（a～e）。

- a. 努力
- b. 能力
- c. 運
- d. テストの困難度
- e. その他

上記a～dまで、いずれも5段階評定。数値が大なほど、それぞれ努力したから、能力があったから、運がよかったから、テストが易しすぎたからとみなしていることを意味する。eのその他については、自由にその原因を記入させた。

4. 知りたい情報の種類：クラスの平均点、最高点、最低点、すぐ上の人、すぐ下の人、および特に知りたいとは思わないの6つのうち、いずれを知りたい（あるいは、特に知りたいとは思わない）かを順に記入させた。

5. 前の質問項目4で答えた情報の知りたさの程度（1：弱い～5：極めて強い5段階評定）。

6. 比較を行いたい集団の種類：旧帝大系の学

生、自分と同じ大学（教育大学）の他のクラスの学生、自分の通う大学と同県内にある短大の学生のうち、どの集団の得点を知りたいか、あるいは特に知りたいとは思わないかを順に記入させた。

7. 「心理学概論」のテストを受けるにあたっての勉強量の自己評価（1：やらない～5：よくやった）。

8. 大学の成績の重要性（1：重要ではない～5：重要である）。

9. 当該科目（心理学概論）の重要性（1：重要ではない～5：重要である）。

10. 他者の得点の気になり方（1：気にならない～5：気になる）。

11. 他者のうち、誰の得点が気になるか：親しい友だち、成績が良いと自分と思う人、成績が悪いと自分と思う人のうち、どの人の得点が気になるかを順に記入させた。

結 果

1. テスト成績の高・低別の自己評価、原因帰属、情報接触欲求、および重みづけによる原因帰属

「心理学概論」のテストを受け、その終了時と答案返却時の2度の調査に答えた有効回答者69名のテスト得点の平均は66.22点（SD = 15.84）であった。そこで、テスト得点が76点以上の20名（男2名、女18名）を成績上位群（以下H群）、57点から74点までの30名（男6名、女24名）を成績中位群（M群）、56点以下の19名（男4名、女15名）を成績下位群（L群）とした。H群は、有効回答者の29.0%，M群は43.5%，L群は27.5%にあたる。そして、各群ごとに、5段階評定による自己評価、原因帰属、情報接触欲求の程度などの平均値を示したのが表1、表2である。表1はテスト終了時、表2は答案返却時の回答である。

表1 テスト成績の高・低別の自己評価、原因帰属、情報接触欲求

— テスト終了時の場合 —

（5段階評定）

	自己評価	原因帰属					知りた さ	勉強量	成績の 重要性	当該科目 の重要性	他者の得 点の気にな り方
		努	力	能	力	運					
H群	\bar{X}	2.80	2.80	3.05	2.60	3.10	2.90	2.90	3.70	3.50	3.05
(n = 20)	SD	0.75	1.25	0.38	1.07	0.62	1.14	0.77	0.84	0.67	1.36
M群	\bar{X}	2.43	2.20	2.77	2.77	2.87	3.00	3.93	3.93	3.73	2.97
(n = 30)	SD	0.67	1.25	0.50	0.50	0.62	1.03	0.81	0.81	0.57	1.02
L群	\bar{X}	1.79	1.95	2.89	2.63	2.74	2.74	2.68	3.63	3.63	2.58
(n = 19)	SD	0.83	1.00	0.55	0.81	0.44	1.07	0.73	0.67	0.58	0.94

表2 テスト成績の高・低別の自己評価、原因帰属、情報接触欲求

— 答案返却時の場合 —

（5段階評定）

	自己評価	原因帰属					知りた さ	勉強量	成績の 重要性	当該科目 の重要性	他者の得 点の気にな り方
		努	力	能	力	運					
H群	\bar{X}	3.70	3.30	3.10	3.70	3.35	3.00	3.30	3.60	3.50	3.05
(n = 20)	SD	0.84	1.14	0.44	1.00	0.73	0.84	0.90	0.66	0.59	1.12
M群	\bar{X}	3.20	2.83	2.97	2.97	2.83	3.13	3.93	3.93	3.80	2.93
(n = 30)	SD	1.11	1.07	0.41	0.41	0.52	1.02	0.63	0.63	0.65	1.03
L群	\bar{X}	1.53	1.79	2.79	2.26	2.84	3.00	2.53	3.95	3.84	2.95
(n = 19)	SD	0.60	0.89	0.41	0.64	0.59	1.17	0.99	0.89	0.67	0.89

表1と表2の各項目ごとに、テスト成績（H、M、L）と調査時期（テスト終了時、答案返却時）の3×2の分散分析を行った。なお、調査時期の要因は被験者内要因である。

自己評価は、テスト成績、調査時期の主効果と両要因の交互作用が有意となった〔それぞれ $F(2, 66) = 69.59, P < .001$ ； $F(1, 66) = 7.31, P < .01$ ； $F(2, 66) = 4.36, P < .05$ 〕。自己評価は、H群とM群がL群よりも高い（いずれも $P < .01$ ）。また、テスト終了時よりも答案返却時のほうが高くなる。これは、H群とM群で顕著であり（それぞれ $t = 4.73, df = 19, P < .001$ ； $t = 3.61, df = 29, P < .01$ ）、L群では大きな変化はみられない。

原因帰属の要因のうち、努力は、テスト成績の主効果がみられた〔 $F(2, 66) = 22.44, P < .001$ 〕。H群がL群よりも努力したからと答えている（ $P < .05$ ）。なお、H群やM群は、テスト終了時よりも答案返却時において、より努力したからと答えている（それぞれ $t = 2.52, df = 19, P < .05$ ， $t = 2.83, df = 29, P < .01$ ）。

能力の要因については、テスト成績の主効果がみられた〔 $F(2, 66) = 6.63, P < .05$ 〕。H群が、M群やL群よりも能力があるからと答える傾向にある（いずれも $P < .10$ ）。

運の要因については、テスト成績、調査時期の主効果と両要因の交互作用が有意となった〔それぞれ、 $F(2, 66) = 9.93, P < .001$ ； $F(1, 66) = 5.42, P < .05$ ； $F(2, 66) = 10.33,$

$P < .001$ 〕。H群がL群よりも運がよかったと答えており（ $P < .05$ ）、また、テスト終了時よりも答案返却時において、より運がよかったと答えている。なお、H群は、テスト終了時よりも答案返却時において、より運がよかったと答えているのに対し（ $t = 4.07, df = 19, P < .01$ ）、L群は、逆に、答案返却時に、運が悪かったと答える傾向を強めている（ $t = 2.35, df = 18, P < .05$ ）。

課題の要因については、テスト成績の主効果がみられ〔 $F(2, 66) = 13.23, P < .001$ 〕、H群が、M群やL群よりも、課題が易しかったと答えている（いずれも $P < .05$ ）。

情報接触欲求としての情報の知りたさ、他者の得点の気になり方については、主効果、交互作用ともみられなかった。

勉強量については、テスト成績の主効果がみられ〔 $F(2, 66) = 57.76, P < .001$ 〕、M群が、H群やL群よりも勉強したと答えている（それぞれ $P < .05$ ， $P < .01$ ）。また、H群もL群より勉強したと答えている（ $P < .05$ ）。

大学の成績の重要性は、テスト成績の主効果の傾向がみられ〔 $F(2, 66) = 2.89, P < .10$ 〕、M群がH群よりも大学の成績を重要とみる傾向がある。同様に、当該科目の重要性もテスト成績の主効果がみられ〔 $F(2, 66) = 4.54, P < .05$ 〕、M群がH群より当該科目を重要とみる傾向がある。

次に、重みづけによる原因帰属に関する結果を表3に示した。各群とも、テストの成績が、努力

表3 テスト成績の高・低別にみた重みづけられた原因帰属の結果

(range: 0~10)

		テスト終了時					答案返却時				
		努力	能力	運	テストの 困難度	その他	努力	能力	運	テストの 困難度	その他
H群	\bar{X}	4.08	1.08	2.35	1.65	0.85	3.40	1.15	3.10	1.70	0.65
(n=20)	SD	1.79	0.87	1.24	1.15	0.96	1.32	0.85	1.64	1.14	0.79
M群	\bar{X}	3.93	1.05	2.50	1.75	0.77	2.97	1.20	3.10	1.43	1.30
(n=30)	SD	2.05	0.82	1.34	1.16	0.96	2.11	0.75	1.62	0.99	1.51
L群	\bar{X}	4.68	1.21	1.68	1.58	0.84	5.05	1.11	2.05	1.16	0.63
(n=19)	SD	1.89	1.00	1.38	1.09	1.09	2.26	0.85	1.36	1.09	0.93

表4 知りたい情報の種類

	(第1選択, 数値は人数)					
	テスト終了時			答案返却時		
	H	M	L	H	M	L
平均点	14	26	16	15	21	11
最高点	2	1	0	2	3	0
最低点・特に知りたいとは思わない	4	3	3	3	6	8
	20	30	19	20	30	19

要因, ついで運の要因と深く関わっていると答えている。ここで各項目ごとに, テスト成績(H, M, L)と調査時期の3×2の分散分析を行った。

まず, 努力要因は, テスト成績の主効果がみられ〔F(2, 66) = 11.99, $P < .001$ 〕, L群が, H群やM群よりも, 努力要因との関わりを強調している(それぞれ $P < .05$, $P < .01$)。

能力は, 各群ともテスト成績と関連があるとはみなしておらず, また, 主効果, 交互作用のいずれもみられなかった。

運の要因については, テスト成績の主効果があり〔F(2, 66) = 10.48, $P < .001$ 〕, 調査時期の傾向もみられた〔F(1, 66) = 3.36, $P < .10$ 〕。H群とM群が, L群よりもテスト成績を運の要因に帰属する傾向が強い(いずれも $P < .05$)。また, 答案返却後のほうが, 運の要因に帰属する割合が高くなる傾向を示している。

課題およびその他の要因については, 主効果, 交互作用とも有意ではなかった。

ところで, 知りたい情報の種類について, その第一選択の結果を調査時期別に示したのが表4である。

テスト終了後, 答案返却時いずれにおいても, 平均点を知りたいとするものが最も多く, 各群間に大きな差はみられない。しかし, L群の場合, テスト終了時から答案返却時にかけて, 平均点を知りたいとする人数が減少し, 最低点や特に知りたいとは思わないとする人数が増加する傾向がある($\chi^2 = 5.0$, $df = 1$, $P < .05$)。

表5は, 比較を行いたい集団についての第一選択の結果である。各群とも, 特に知りたいとは思わないが最も多く, ついで, 教育大学の他のクラ

表5 比較を行いたい集団

	(第1選択, 数値は人数)					
	テスト終了時			答案返却時		
	H	M	L	H	M	L
他のクラスの学生	5	11	5	2	10	4
旧帝大系の学生	2	1	2	1	1	1
短大生	0	0	0	0	0	0
特に知りたいとは思わない	13	18	12	17	19	14
	20	30	19	20	30	19

スの得点を知りたいの順となっている。これは, 調査時期による変化もほとんどみられず, テスト成績の高・低による顕著な差もみられない。

表6は, 誰の得点が気になるかについての第一選択の結果である。親しい友だちの得点が気になるとの回答が最も多く, テスト成績の高・低, 調査時期による有意な差はみられない。

2. テスト成績, 自己評価, 原因帰属, 情報接触欲求間の関係

テストの成績と, 5段階評定による自己評価, 原因帰属, 情報接触欲求間の関係をピアソンの相関係数によりみたのが表7と表8である。表7はテスト終了時, 表8は答案返却時の回答に基づくものである。

テスト終了時の場合, テストの成績は, 自己評価, 努力との間に正の有意な相関がみられる。つまり, 実際のテストの成績が良いほど, 自己評価が高く, 努力したからと答える傾向がある。自己評価は, 努力と相関があり, これは, テスト成績と努力の相関より高い値となっている。また, 自己評価が高いほど, 運がよく, テストが易しいと考え, 勉強量も多いと答える傾向がみられる。

表6 誰の得点が気になるかについて

	(第1選択, 数値は人数)					
	テスト終了時			答案返却時		
	H	M	L	H	M	L
親しい友だち	11	20	13	11	19	11
成績がよいと思う人	7	10	5	8	9	6
成績が悪いと思う人	1	0	1	1	2	2
	19	30	19	20	30	19

表7 テストの成績、自己評価、原因帰属、情報接触欲求間の関係（ピアソンの相関係数）

— テスト終了時の場合 —										
(1) テストの成績	1									
(2) 自己評価	.427***	1								
(3) 努 力	.260*	.415***	1							
(4) 能 力	.117	.101	.058	1						
(5) 運	-.001	.311*	.138	-.011	1					
(6) テストの困難度	.244	.250*	-.037	-.040	.345**	1				
(7) 情報の知りたさ	.106	.057	.220	.032	.088	.029	1			
(8) 勉強量	.132	.296*	.728***	-.003	.009	-.094	.241	1		
(9) 成績の重要性	.070	-.100	-.066	.339***	.132	-.047	-.026	-.122	1	
(10) 当該科目の重要性	-.069	.002	.184	.147	-.013	-.181	-.143	.080	.343**	1
(11) 得点の気になり方	.120	-.059	.125	.105	-.168	-.175	.379**	.244	.001	.016

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

表8 テストの成績、自己評価、原因帰属、情報接触欲求間の関係（ピアソンの相関係数）

— 答案返却時の場合 —										
(1) テストの成績	1									
(2) 自己評価	.730***	1								
(3) 努 力	.540***	.668***	1							
(4) 能 力	.311*	.231	.393**	1						
(5) 運	.508***	.770***	.517***	.217	1					
(6) テストの困難度	.301*	.336**	.311*	.257*	.455**	1				
(7) 情報の知りたさ	-.020	-.040	-.139	.072	-.031	-.130	1			
(8) 勉強量	.308*	.368**	.752***	.309*	.202	.164	-.069	1		
(9) 成績の重要性	-.191	-.177	-.124	-.022	-.047	-.157	-.046	-.132	1	
(10) 当該科目の重要性	-.185	-.197	.073	.009	-.113	-.146	-.214	.019	.480***	1
(11) 得点の気になり方	.014	-.048	-.185	.227	-.110	-.198	.503***	-.109	.071	-.185

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

帰属要因間の関係では、運とテストの困難度の間にのみ正の有意な相関が認められた。運がよかったと答えるものほど、テストが易しかったとみなしている。

情報の知りたさは、得点の気になり方との間に有意な正の相関がみられるにとどまっている。

答案返却時は、テスト終了時よりも多くの有意な相関値が得られている。

まず、テストの成績は、自己評価、努力、運との間に比較的高い相関が認められ、これらは、いずれもテスト返却時より大きな値を示している。テスト成績の良いものほど、自己評価が高く、努

力したからと答え、また、運もよかったとみなしている。さらに、テスト成績が良いほど、能力があり、テストが易しく、勉強量も多いと答える傾向にある。

自己評価は、努力、運との間に高い相関があり、テストの困難度、勉強量との間にも相関がみられる。しかし、能力とは有意な相関がみられない。この点が、実際のテスト成績と異なるところである。

帰属要因間の関係をみると、努力要因は、能力、運、テストの困難度のいずれとも正の有意な相関がみられる。特に運との相関が高く、努力したと

答えるものは、運もよかったと答え、また、能力もあり、テストが易しかったとみる傾向がある。

さらに、能力と運は、いずれもテストの困難度と正の有意な相関があり、能力がある、あるいは運がよかったとするものは、テストが易しかったとみる傾向がある。

情報の知りたさは、得点の気になり方との間でのみ正の有意な相関が認められたにすぎなかった。この点は、得点の気になり方の場合も同様であった。

考 察

1. テストの成績と自己評価、情報接触欲求間の関係

自己評価は、テスト成績の良い群で相対的に高くなっているが、これは、答案返却後においてより強くなる。得点結果がフィードバックされることにより、明確な自己評価がなされたことを示している。

しかし、こうした自己評価の違いにもかかわらず、情報接触欲求としての情報の知りたさの程度や他者の得点の気になり方の程度は、テスト成績の高・低や調査時期によって差がみられない。したがって、特に答案返却時において、成績上位群では、自己高揚的比較がみられるとの予測は支持されなかった。

この点は、知りたい情報の種類や比較を行いたい集団の種類に関しても同様であり、いずれの場合も自己高揚的比較はみられていない。

知りたい情報の種類として平均値が最も多い点、誰の得点が気になるかについて親しい友だちが多い点は、これまでの研究と同じで、最も自然な形での情報接触傾向が示されているといえる。

さて、自己高揚的な比較がみられないことについては、磯崎（1987）の結果で、部分的にであれ、そうした比較がみられているだけに解釈が難しい。当該科目の重要性もけっして低いわけではない。また、大学生にとってテストの成績がまったく気にならないといった性質のものでもないように思われる。

というのは、成績下位群は、テスト終了時に比べ、答案返却時において、知りたい情報の種類に

ついて、平均値を求めるものが減少し、かわって最低点や特に知りたいとは思わないとするものが増えているからである。これは、自己防衛的比較ないし社会的比較の回避傾向を示していると考えられる。

総じていえば、予想されたようなより自己を高める形での社会的比較や情報接触傾向はみられなかった。テスト成績の高・低にかかわらず、情報接触欲求は低く、これまでの結果を確認するにとどまっている。むしろ、これまで以上に、消極的な情報接触傾向が強まっているように思われる。

その意味では、同一個人内の情報接触欲求の変化に関しては、必ずしも十分な結果は得られなかったといえる。

2. テスト成績と原因帰属の関連

テスト成績に対する原因帰属として、努力要因が重視されている点は、これまでと同様である。しかも、調査時期の違いによって、原因帰属の仕方が変化し、テスト成績や自己評価と原因帰属の関連がより明確になることが明らかとなった。

特に、努力と運の要因は、答案返却後においてテスト成績と自己評価に最も深く関わっているとみなされている。また、テスト終了時では、有意な相関がみられなかった能力の要因も、答案返却後では、テスト成績との間に有意な正の相関を示している。

このように、努力や能力の要因が、答案返却後にテスト成績との相関をより強く示したことは、明確な自己評価の反映であるとともに、成績上位および中位群が、答案返却後、より努力したからと答えていることから、より自己を高められるような形での原因帰属がなされていることを示唆している。つまり、本研究での予測がある程度支持されたといえよう。

さらに、テスト返却時においてまったく相関のみられなかった運の要因が、答案返却後にテスト成績とかなりの正の相関を示している点も興味深い。これは、答案返却後、成績上位群は、より運がよかったと考え、成績下位群は、逆に運が悪かったと答える傾向を強めることと符合している。後者は、自己防衛的帰属といえるかもしれない。

いずれにせよ、答案返却後は、より明確な帰属

がなされ、各帰属要因間の相関も高くなる傾向がみられる。特に、努力と運という不安定要因間の相関が高い。これら2要因は、テスト成績との相関も高く、この点は、重みづけられた原因帰属の結果からもうなづけるところである。

テスト成績における努力要因と運要因の重視は、これまでの結果があらためて確認されたといえる。

引用文献

Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117 — 140 .

磯崎三喜年 1987 成績の自己評価と社会的比較および原因帰属の関連について 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 11, 13—20.

磯崎三喜年 1988 成績の自己評価と社会的比較および原因帰属の関連について II 愛知教育大学研究報告 (教育科学), 37, 161—168 .